

誰一人
帰らない

『奈落』

に落とされた

おっさん

暗号

を解説
したら、

未知の遺物

の使い手に
なりました！

5
vol.

ミポリオン

illustration

片瀬ぼの

仮面の男

アルカナに従える謎多き男。

アルカナ

バレッタと同じアンドロイド。
行く先々でケンゴたちの前に
立ちはだかる。

フィー

エルフの森で仲間になった
精霊。強力な風魔法を操る。

リユー

ケンゴたちが保護した、
龍のような生物。

ジンライ

光属性の攻撃を得意とする
SSランクの冒険者。

バレッタ

ケンゴが見つけた巨大船の管理人で、
高性能なアンドロイドメイド。

イナホ

ケンゴが契約を結んだ、
猫に似た動物。

ケンゴ

元は冴えない中年サラリーマン。
追放先の『奈落』で封じられた
巨大船を見つけたことをきっかけに
若返り、超技術の力を手に入れる。

リンネ

有名なSSSランク冒険者の剣士。
極度のツンデレ。

主
な
登
場
人
物

MAIN CHARACTER

第一話 魔大陸

「何か面白いことでも起こらないかしら……」

退屈そうにそう言うのは、十代後半ほどの金髪サイドテールの美少女。

抜群のプロポーションを露わにする真っ白なビキニが眩しい。

彼女の名はリンネ・グラヴァール。

俺——福菅健吾と一緒に旅をしている仲間であり、彼女だ。

「だなあ」

俺とリンネは船の甲板^{かんぱん}でデッキチェアに座り、のんびりと空を見上げた。

この船は帆船にしか見えないが、実は俺がダンジョンの隠し部屋で手に入れた宇宙船——アルゴノイアが偽装している姿だ。

俺たちは踏み入れた者は誰一人帰ってこないという魔の海域に向かう途中で、ヘコポー海賊団に襲われた。

彼らを撃退して魔の海域まで案内させ、マグマが湧き出ていたり、なぜか割れ目があったりという本当に海かと疑うような海域を踏破したところ、一つの島にたどり着いた。

そこで牢に捕らえられていた人魚のアローネを救出すると、俺たちは海底にある人魚の里へ招待

された。

盛大に歓迎してくれた彼らだったが、水質汚染という深刻な悩みを抱えていることを知り、俺たちはその原因を調査することに。

向かった先で見つけたのは、空中要塞を建造する秘密基地だった。

これまでの事件の裏で糸を引いていたアルカナたちの関与を疑っていると、予想は的中。

アルカナと対峙し、空中要塞を破壊しようとしたところに彼女の主人と思しき仮面の男が現れる。要塞は破壊できなかったものの、幸い、拉致されていた人たちは無事に救助できたとし、水質汚染もとめられた。それだけでも大成功と言えるだろう。

俺たちは人魚の里に別れを告げ、魔大陸に向かって航海を続けたのだった。

でも、人魚の里を出発してもうかれ一週間。

海で楽しむようなことはやりつくしてしまい、やる事がなくなってしまった。

ゲームをしたり、アニメを見たりする手もあるが、引きこもってばかりもあまり良くない。

かといって、空を飛んで一足飛びに目的地に行ってしまうのもゲームーとして認められない。

その結果、こうやってリゾート気分を味わいながら暇を持て余すことになったのだった。

「zzz……」

俺は腹の上で丸まって眠る猫っぽい動物を撫でる。

尻尾が二つに分かれ、額に特徴的な模様があるため、猫とは言い切れない。

名前はイナホ。だいたい食べるか寝るかしているマイペースな俺たちのペットだ。

「キュウッ！」

『まてえ〜』

周りでは小さくて真つ白な竜と緑色の髪の少女が追いかけてっことをしている。

竜は海底の沈没船で見つけた卵から生まれ、そのまんまリユーと名付けた。

少女はエルフの森で俺と契約して仲間になった森と風の精霊で、フィーと呼んでいる。

二人は飽きもせず、毎日楽しげにキャッキャと遊んでいる。

「皆様、こちらをどうぞ」

俺たちのもとにメイド服を着た女性がやってくる。

どこをどう見ても人間にしか見えないが、実は遥か昔に造られたアンドロイド。

名をバレッタという。

完璧なメイド——パーフェクトメイドを自称し、俺たちの世話をしてくれている。

それはもう本当に隅から隅まで……いや、これ以上考えるのはよそう。

彼女の手にはお盆があり、その上にはトロピカルジュースが載せられていた。

「ありがとう」

「いたadakわ」

『ジュース！』

『わあーい！』

「キュウッ！」

匂いにつられて、眠っていたイナホが目覚まし、皆で集まってジュースを飲む。

「美味い」

「ホントね。体に染みわたるわあ」

冷たさが口から喉を通り、胃に入っていくのが感じられる。

火照った体に心地いい。

そうやってのんびり過ごしていると、突然館内放送のようなアナウンスが聞こえてきた。

『おい、てめえらっ、見えてきたぞ！』

べらんめえ口調のような話し方をするのは、自立型のゴーレムのダンボンだ。

ドワーフの住む大洞窟の奥の隠しエリアで出会い、仲間にした。

古いパソコンのディスプレイに手足を生やしたような姿で、船の管理をしてくれている。

そのおかげでバレッタの業務が減り、彼女が俺の傍に控えることが多くなった。

ダンボンの言う通りに船の前方を見ると、うつすらと大陸が見える。

「あれか」

「ふう、やっとね。魔大陸も初めてだから楽しみだわ」

俺たちは新しい大陸に思いを馳せる。

近くに見つけた港に辿り着くと、巡回船の指示を受けて、空いている場所に船を停めた。

「船の外は少し肌寒いかと。厚着されることをお勧めします」

「了解」

俺たちはバレッタの言葉に従い、いつもより暖かい格好に着替える。

船から降りると、確かに風が冷たい。

アルゴノイアの周囲にはシールドが展開されていて適度な環境に保たれているので、船上がどれだけ快適だったのが窺える。

港では多種多様な種族が荷物を船に積み込んだり、話したりしていた。

「アルクイメスも色々な種族がいたけど、ここはまた違うな」

「ホントね」

アルクイメスは人間やエルフ、ドワーフ、獣人などの人間に近い種族が多かった。

でもここには、そもそも人型ではなかったり、体のサイズが違ったりと、俺たちとは見た目がかげ離れた存在がたくさん見られる。

そのせいか街の建物の大きさも不揃いだ。人間用の建物をそのまま何倍も巨大化させたものもあれば、逆に妖精が使いそうな滅茶苦茶小さな建物もあったりする。

その歪さが独特な街並みを創り出していた。

『いろんな人がいるう』

『おもしろーい！』

「きゅっ」

イナホたちも街ゆく人たちを物珍しそうに見ていた。

人間やエルフとは違い、多種多様な種族がいるのに、彼ら全てをひっくるめて魔族と一括りにす

るのはどうかと思う、なんて、目の前の光景を見て俺は感じた。

「着いてからのこと何も考えてなかったけど、これからどうする？」

「そうねえ。何か面白そうな場所や依頼の情報をもらえるかもしれないし、冒険者ギルドに行ってみましょう」

「そうしますか」

方針は決まった。

でも、これだけ様々な建物があると、何を頼りにギルドを探したらいいかわからない。

そこで俺は通りがかった二足歩行のイタチみたいな人に声をかけた。

「すまん、ちょっといいか？」

「なんだ、あんたら？」

イタチ人の声は低くて男っぽい。

俺たちを見て怪訝な顔をしている。

「いや、ちょっと道を尋ねたいんだけど、冒険者ギルドってどこにあるかわかるか？」

「ん？ もしかして魔大陸は初めてか？」

「ああ、さっき船で着いたばかりだ」

俺は後ろの船がある方を指していった。

「そりゃあ、知らなくて当然だな。ギルドならあそここの道から港を出て、まっすぐ行った先にあるデカイ建物だ。分かりやすい見た目だから行けば分かるだろうぜ」

「そうか、ありがとな」

俺はイタチ人が示した先の道を確認してから、教えてくれたお札に硬貨を指で弾いて渡した。

「おつ、サンキュー！ それじゃあな」

イタチ人は硬貨を受け取ると、手を上げて去っていった。

話し終えて振り返ると、リンネたちは目を真ん丸にしている。

「どうした？」

「いつものことながら不思議な光景だわ」

「なんのことだ？」

何もおかしいことをしたつもりはない。

「さっきの彼、共通語を話していなかったわよ」

「マジかよ」

どうやら無意識に翻訳して受け答えしてしまったようだ。

だから、いつもとは違った言語を話す俺に驚いたらしい。

最近忘れがちになるけど、どんな言葉も分かるのは俺だけなんだよな。

この世界に來た時に手に入れたユニークスキル『言語理解』の数少ない恩恵だ。

「それで、何を話してたの？」

「冒険者ギルドの場所を聞いてた。あっちだってよ」

「やっぱりそのスキル便利ねえ」

これしか持っていなかったから奈落に落とされるっていう悲劇もあったけど、今となっては良かったと思う。

「だなあ。それじゃあ行くか」

「そうね」

教えてもらった通りに冒険者ギルドに向かって歩き出す。

港を出た先に続いていた坂を上り終えた後、俺たちは目の前の光景に驚いた。

「でけえ……」

「ホントね……」

冒険者ギルドはとんでもなく巨大な建物だった。

もはや城と言っても遜色のないレベルだ。

人間の冒険者ギルドをそのまま数倍に拡大した外観で三階建て。

まるで自分が小人にでもなったような気分だ。

『おっきいっ！』

「キュウツ！」

フィーとリ्यूが俺たちの周りを楽しそうに飛び回る。

イナホはすでにリンネの腕の中でスヤスヤと眠っていた。

入り口のスイングドアの高さも俺の顔の位置だ。

それだけ大きな体の種族がいるってことだよな。

「中也面白いな」

人間の冒険者ギルドとは違い、窓口は依頼者の体のサイズごとに分かれていた。

ギルドの中では、予想通り大小様々な種族の魔族たちが闊歩している。

カウンターには一つ目の巨大な女性が座っていた。

俺たちは自分たちの体に見合った受付に向かう。

「こんにちは。ようこそ、いらっしやいました。本日はどのようなご用件ですか？」

俺たちの対応してくれたのは、青白い肌と深紅の瞳を持つ女性。

笑顔の時に覗く長い犬歯を見る限り、多分吸血鬼系の種族だと思う。

「顔を出しにな。面白そうな依頼があれば受けようと思ってる」

「しょ、少々お待ちください。上の者に確認を取ってまいりますので！」

俺たちがギルドカードを提示すると、受付嬢は急いで奥へと向かい、すぐに戻ってきた。

「お待たせしました。ギルドマスターの部屋にご案内させていただきます」

「よろしく」

言葉が分からないリンネたちにも説明し、受付嬢の後をついていく。

大きい種族を基準に造られているからか、内部も巨大だ。

廊下も横に十メートルくらいの幅があるし、ドアの高さも全体で四メートル。

ただ、ドアは入れ子構造みたいになっていて、体の大きさに合わせて開く場所が変わる仕組みだった。

「失礼します」

受付嬢がノックしてから、人間サイズの取っ手を握り、扉を開ける。

室内も大きな種族用の造りで、奥にある巨大な執務机に赤い鬼が座っていた。

いわゆるオーガのようにも見えるが、オーガよりも人間に近く、瞳に知性を宿している。ただ、顔はものすごくいかつくて怖いので、人間の子供が見たら泣いてしまうだろうな。

「よく来たな。俺がこの港町のギルドマスター、アコーニだ。これに座ってくれ」

アコーニは立ち上がって俺たちの方へとやってくる。

座っていてもデカかったが、立ち上がるとその大きさが改めてよく分かる。

身長は三メートルを超えていそう。声も太鼓を間近で叩かれたように体に響く。

アコーニは来客用の巨大なソファアアをどかし、俺たちに合わせたソファアに入れ替えてくれた。

「ありがとう。俺はケンゴだ。よろしく」

「私はリンネ。よろしく。流石ギルドマスター、共通語が話せるのね、助かるわ」

「まさかSSSランクの冒険者が来てくれるとはな。よろしくな。まあ、ギルドマスターなんてやっていると、他国の奴らと話す機会もあるからな。俺以外でも一定以上の役職に就いている職員ならある程度共通語も話せるぞ」

全世界にわたって展開している組織の支部とはいえ、長は長。

他国の人間と交流できないのでは困るだろうし、部下にも示しがつかないだろうな。

「それもそうか」

俺と一緒に異世界に転移してきた高校生の勇気たちは、魔族の街で言葉が分からずに難儀していたと言っていたが、共通語を話せる者に会えなかったんだろう。

「それで、お前さん方はどうして魔大陸に？」

お互いにソファアに腰を下ろし、本題に入る。

「観光というか、まだ見ぬ秘境やダンジョンを探して、だな」

「今時珍しい冒険者らしい冒険者だな」

アコーニが言うには、最近の冒険者は生きるために依頼を受けているタイプが多いらしい。

俺たちみたいに、未知の場所を開拓していく冒険者はあまりいないそう。

この魔大陸の冒険者だって命はたった一つだ。

危険がある未知の場所に好んで挑もうと考える奴は多くないというわけ。

俺もアルゴノイアの所有者になっていなければ、ひっそりと過ごしていたに違いない。

いや、その前に俺もリンネも奈落での一件で死んだか……

リンネが俺に続いてアコーニに説明する。

「そのついでに私たちがじゃないと解決できないような依頼がないか尋ねてきたってわけ」

「なるほどな。それはちょうど良いタイミングだ。少々面倒な案件がある」

「どんな話だ？」

アコーニはでかいテーブルの上に、これまた大きな地図を広げて話し始める。

「この街の北に万年雪に閉ざされたホワイトマウンテンがあるんだが、そこでAランクモンスター

のベアーラビットが大繁殖している。高ランクパーティを集めて合同作戦を行えば対処できるだろうが、敵の数によっては少々不安がある。お前さんたちが受けてくれるなら言うことはないんだが、どうだ？」

「雪山か。いいかもしれないな」

この世界に来てから寒い場所に行ったことがない。

折角だから、モンスター退治のついでにウィンタースポーツをして遊ぼう。

「ええ、寒いだけじゃないの？」

「なんだ、雪で遊んだりしないのか？」

「しないわねえ。モンスターに襲われたら危ないもの」

「なるほどなあ」

魔の海域で聞いたのと同じような答えがリンネから返ってきた。

言われてみれば雪山だってこの世界なら危険地帯には変わりない。

わざわざ遊ぶ場所を選ぶはずもないか。

でも、それならなおさらだ。

皆にも雪の楽しみを堪能してもらおう。

「分かった。その依頼、受ける」

俺がアコーニの申し出を二つ返事で承諾しようとする、リンネが訝しげな顔をした。

「ホントに？」

「まあ、騙されたと思って受けてみてくれ」

「うーん、しょうがないわね。考えがあるんだろうし、引き受けるわ」

実際にやれば、リンネも気に入ってくれるだろう。

俺たちのやり取りを見守っていたアコーニはホッと息を漏らして笑顔を作った。

「そうか、助かる。手続きはこっちでやっておくから、早めに向かってくれるか？」

「了解」

俺たちはギルドを出て、そのまま街の北へと向かったのだった。

翌日。

辺りはすっかり冬景色。

雪が降り積もる中、俺たちは道なき道を超古代文明の技術で造られた馬車——チャリオンに乗って進んでいた。

馬車で一週間はかかるという話だったけど、チャリオンの力をもってすれば雪道も障害にならない。たった一日で到着した。

窓の外を見ながらリンネが呟いた。

「真っ白ねえ」

「こんな景色も久しぶりだな」

『かき氷のシロップをかけたら美味しそう！』

『しろーいつ!』

「キュイツ」

外の景色にイナホとフィー、そしてリユーがはしゃぐ。

三人とも初めてだろうからこのリアクションになるのも当然だな。

ほどなく出発時から見えていた真っ白な山の麓へとたどり着いた。

馬車の扉を開けると、我先にと厚着をしたイナホたちが外へと飛び出す。

『冷たっ!』

「キュツ」

イナホとリユーが、体に直接雪が触れたことで、その冷たさに驚いて飛び跳ねる。

二人に触発されたフィーもしゃがんで手で雪に触れた。

『つめたーい!』

フィーは初めての感触に嬉しそうにはしゃぐ。

「懐かしいな」

「ケンゴが住んでいたところも雪が降るの?」

馬車を降り、イナホたちの姿を見て地球を懐かしんでいると、隣にリンネが並んだ。

「冬にはいつも積もっていたぞ。小さい頃は雪で遊んだもんだ」

「へえ」

俺は豪雪地帯というほどではなかったけど、結構雪が積もる地方で育った。

だから、雪の楽しさも辛さもどっちも知っている。

大人になった後は、雪なんて山にだけ降ればいいと思っていたな。

たまに降るくらいなら気にならないかもしれない。

でも、毎日のように積もると、雪かきや雪道が悩みの種になって段々雪が憎くなっていく。

本当に厄介な問題だった。

「さあ、はしゃぐのはそろそろ終わりにしよう。遊ぶのは仕事が終わってからな」

『『はぁーい!』』

パンパンと手を叩いてからイナホたちを宥め、俺たちは雪山の奥に進んでいく。

「探すまでもないな、これは」

「そうねえ」

ベアーラビットは雪山を少し歩いただけで姿を現した。

ベアーラビットという名前から、熊にうさ耳が生えたようなモンスターだと思っていた。

でも、実際は逆で、熊みtainな巨体に、鋭い牙と爪を持つ真っ白なウサギだった。

大繁殖というだけあって至る所にベアーラビットの姿がある。

「それじゃあ、さっさと倒しますか」

「そうね」

『やるよー!』

『唐揚げの材料にしてやるう!』

「キュッ！」

皆、やる気をみなぎらせている。

一人だけ涎^{よだれ}を垂らして、食材としてしか見てない奴が混じっているけどな。ただ、少し心配なことがある。それはリユーのことだ。

「リユーも戦うのか？」

「キュウッ！」

リユーはまだ生まれたばかりで戦闘経験がない。

そんな中、初めての戦闘でAランクモンスターを相手にするのは厳しいだろう。

無理して戦う必要はないと伝えようと思ったが、リユーの目はやらせてほしいと言っていた。

俺はその熱意に負けて戦わせてみることにした。

縄張りに入ってきたのを察知したベアーラビットが、雪煙を上げながら突進してくる。

雪の上を走っているとは思えないほど俊敏だ。

おそらく雪山は彼らのフィールドなんだろう。

「ベアアアアッ！」

「やあっ！」

「ベアッ!?」

リンネが襲いかかってくるベアーラビットをやすやすと切り裂く。

ベアーラビットはその場に倒れ伏した。

「ほら、ぼさつとしないでさっさと行くわよ！」

「はいよっ。リユー、いくぞ」

「キュッ」

俺は肩を竦めながら、リユーを連れてベアーラビットのもとへ向かう。

「はあっ！」

「ベアッ!？」

俺もリンネと同じようにベアーラビットを一撃で切り裂いた。

騒ぎを聞きつけた周りのベアーラビットが一斉に集まってくる。

そこでリユーが俺の前に出る。

どうやら自分の番ということらしい。

「キュッ」

「おいおいっ、この数を相手にするのか？」

生まれて初めての戦闘にしては数が多すぎる。

俺の方を集まっているだけで十匹以上いる。

この数のAランクを相手にするならSランク冒険者くらいの強さは必要だろう。

「キュキュウッ！」

でも、リユーは自分がやると言っただけで聞かない様子だ。

そこまで言うなら、と俺はその気持ちを尊重することにした。

危なくなったら俺が助ければいい。

即死じゃない限り、超古代文明産の回復薬を使えば治せるしな。

「分かった、分かった。見ててやるからやってみろ」

大きく息を吸い込んだリュー。

「キュウウウウウッ！」

「おおっ、これはもしかしてプレスか？」

リューが一瞬息をとめたようなポーズを取った後、思いきり吐き出した。

吐き出されたのはただの息じゃない。

それはまるで火炎放射のような炎だった。

「「ベア……」」

何匹ものベアラビットがリューの青い炎に包まれる。

それを見た周りのベアラビットが動きをとめた。

数十秒後に炎が収まると、こんがりと焼き上がったベアラビットの出来上がり。

「つつよっ」

俺が驚いていると、リンネも同じような表情で俺のところに戻ってきた。

「今のなに！」

「リューが放ったファイヤープレスだ。とんでもなく強力だったな」

「本当に生まれたばかりだとは思えないわね」

「ああ、ホントにな。これからどれだけ成長するのか楽しみだ」

「なんでこんなに強いのかしら？」

ドラゴンとは言え、生まれて間もない赤子。

Aランクモンスターを一度に何匹も屠^ほる力があるとは思えない。

「それはお二人の魔力を受けて育ったからだと思われます」

「そうなのか？」

「はい。ドラゴンは親の血だけでなく、与えられた魔力を受け継ぐと言われています。ドラゴンの身に二人の魔力が注がれ、普通のドラゴンとは違う見た目と力を手に入れたのでしょう」

「なるほどなあ」

襲い来るベアラビットを危なげなく倒しながら、俺はバレッタの説明に頷く。

リューの強さの理由はそういうわけだったのか。

確かにSSSランクのリンネの力と超古代文明のおかげとはいえSSSランク以上とされる俺の力が合わされば、相当な強さになるだろうな。

元がドラゴンならなおさらだ。

「よし、お前で最後だ！」

「ベアア……」

俺たちはそれから数時間で千匹以上ものベアラビットを倒した。

もう周囲にベアラビットらしき姿は見えない。

「お疲れ様」

「ああ、リンネもな。思った以上に時間がかかったな」

「ええ、まさかここまで大規模な群れを作っているとは思わなかったわ」

「確かにアコーニの言う通り、少し面倒な相手だったな」

「そうね。最低でもSSランクはないと一人じゃ厳しいと思うわ。それ以下なら複数のパーティが組まないと無理ね。それでも犠牲が出るだろうけど」

自分で言うのも何だが、超古代文明の力によって俺の戦闘力はリンネより上だ。

くわえて、リンネも治療やこれまでの経験によって、さらに力を増している。

実質、戦力としてはSSランク以上が二人に、Aランクのモンスターを簡単に屠る仲間が三人。これだけの戦力が揃っていたからこそ、あっさり壊滅させることができたと言える。

「依頼は完了したと言ってもいいと思うか？」

「一帯にベアラビットの気配はありません。個体数の増加は収束に向かうでしょう」

リンネに聞いたつもりだったが、代わりにバレッタが答えた。

「本来なら調査が必要だけど、バレッタが言うのなら問題ないと思うわ」

リンネもバレッタの言葉に首を縦に振った。

二人がそう言うなら依頼達成で良いな。

「それじゃあ、これで仕事は終わりだ。早速遊ぼうか」

『やったあ！』

『僕は雪で巨大かき氷を作りたい！』

「キュッ！」

雪で遊ぶと言えば、思いつくのはスキーやスノーボードだろう。

もちろん、アルゴノイアには似たような道具が揃っている。

俺たちはスキーウェアに着替えて、スキーを楽しむことにした。

四足歩行用のスキー板であり、イナホとリューもスキー靴を履いている。

ただ、スキー靴といっても地球のものとは違い、動きにくさを感じない。

まずはある程度の高さまで登り、開けている場所を探す。

この辺りならスキーで滑るのも問題ないだろう。

俺たちは人間離れた身体能力で簡単に山の斜面を登っていきける。

俺以外は全員初心者。なんでもできるバレッタが監督して滑る練習が始まった。

「まずは靴をスキー板に固定してください」

指示に従って靴をスキー板にはめると、地球のスキー靴のように靴が固くなった。

靴にも高度な技術が用いられていて遊びやすいようになっていいるらしい。

バレッタが見本を見せて下で待ち、俺たちがそこまで滑る、という行為を繰り返す。

「へえ、思ったよりも簡単ね」

『これ楽しいん』

『おもしろーい！』

「キュツキュツ」

リンネはSSSランク冒険者だけあって、流石の身体能力であつという間に適応していた。イナホたちも開けた斜面で滑るのは簡単にできるようになった。器用なものだ。それからスノーボーやそりもやってみただけど、どれも全員簡単に覚えてしまった。

「ただ滑っても面白くないから頂上から滑ろうか」

「そうしましょ」

異世界の住人は整備されたゲレンデで滑るスキー程度のスPEEDでは満足できない。

崖のような急な坂や険しい山道みたいな場所を滑るくらいがちょうどいい。

転んだところで怪我すらないだろうしな。

この山は標高が数千メートルで、頂上付近にはまるで崖のような傾斜がある。

そこからなら相当スリリングな滑走を楽しむことができるはずだ。

俺たちはあつという間に山の頂上まで登り切り、辺りを見下ろした。

「なかなかいい景色ね」

「そうだな」

雪山では吹雪が良く発生するが、今日は雲一つない青空。

まさに絶好のスキー日和と言ったところだ。

俺はスノーボー、リンネとバレッタはスキー、イナホたちはそりを選んだ。

「フィーは二人が落ちないように風で守ってくれよ」

『フィーにおまかしえ』

フィーが嬉しそうに手を上げた。

スキーやスノーボーは道具に足が固定されているけど、そりはそうはいかない。

あまりに急な坂やでこぼこした場所を進めば、簡単に吹き飛ばされてしまう。

そこをフィーの風を操る力で皆を飛ばないように上手く押さえてもらうというわけだ。

「よし、行こう！」

『『おーっ（キュッ）』』

皆でほとんど垂直に近い斜面を滑り下りていく。

地球にいた頃の俺ならビビって崖の傍に行くこともできなかったに違いない。

でも、今の俺にとってはこの程度大したことじゃない。

スPEEDスキーと呼ばれる競技だと、時速は二百キロを超えるそうだが、今の俺たちはそのス

PPEEDも超えているかもしれない。

このくらいのスPEEDなら結構楽しい。

思い返せば、マリンスポーツも同じだった。

海でもパワーボートくらいの速度でやって初めて俺たちは楽しめたからな。

海と違うのは障害物もあつて危険が増しているところだ。

でも、俺たちにとってはそれも、ただ楽しみが増すスパイスの一つでしかない。

「ひゃっほーっ！」

「これは爽快ね！」

『面白ーい！』

『きやはははっ！』

「キュウウウッ！」

——ゴゴゴゴゴッ

だが、スパイスはそれだけでは済まなかった。
後方から地鳴りのような音が聞こえてくる。

一瞬振り返ると、斜面の雪に亀裂が入っていく光景が見えた。
雪崩^{なだれ}が起る直前の兆候だ。

その直後、雪崩がまるで波のように俺たちに押し寄せてくる。

前門の障害物、後方の雪崩。

二つの脅威に挟まれた俺たちは、少し身の危険を感じつつも楽しみながら滑っていく。

徐々に傾斜がなだらかになってきた頃、前方にジャンプ台のような地形が見えた。

「いっちょやってみるか」

「何するつもり？」

「まあ見てろって！」

リンネの疑問に答えずスピードを上げてジャンプ台から飛んだ。

そして、ハーフパイプ競技の選手も真つ青な難易度のトリックを決めて着地。最高に気持ちいい。

これは癖になるな。

「なにそれ、面白そうじゃない！」

俺の技を見ていたリンネがやる気を漲らせた。

リンネも俺と同じようにジャンプ台のようになってる岩場を見つけて思い切り飛んだ。

リンネが何十メートルもの空中を舞う。

俺の技を見て思いついたのか、モーグルの選手が披露するような技を決めた。

アクロバティックでなかなか堂にいった様子だった。

『フィーもやるうっ！』

さらにフィーが後に続くとうとする。

フィーは風の力で加速して盛り上がっている部分に特攻。

何十メートルも上空に飛び上がって縦に何度もグルグルと回転して着地した。

そりとは思えないド派手な技だ。

バレッタは無表情で顔色一つ変えず滑り、盛り上がりでジャンプして技を決めた。

その技はもうなんというか神業と呼んで差し支えないほど美しかった。

「なかなかやるな！ 次は俺の番だ！」

「私も負けないわよっ！」

『フィーも！』

俺たちは各々が考えた技を披露しあいながら山を下った。下の方まで戻ると、雪崩も収まって

いた。

それから何度か頂上まで登って、麓まで滑り下りるという遊びを繰り返し楽しんだ。

「なかなか面白かったわね。たまにやってもいいわね」

「そうか？ それじゃあ、また今度やりにこよう」

「良いわね。楽しみにしてるわ」

リンネが満足げに笑う。

楽しそうで何よりだ。

「それじゃあ、次の遊びだ」

「今度は何するの？」

「雪合戦だ」

「雪合戦？」

不思議そうな顔のリンネに雪合戦について説明する。

ルールは相手の雪玉に当たったら退場。仲間が全員いなくなったら負けだ。

ドッジボールに近い。

本来なら相手陣地の旗を取るのが勝利条件だけど、人数が少ないからやめた。

「という感じのゲームだな」

「ふーん、なるほどね。面白そうじゃない」

「まずは、チーム分けをするぞ」

『僕はパス。寝てるねえ』

イナホは雪合戦には興味がなく端に寄って寝始めてしまった。

くじ引きの結果、俺とフィーが同じチームで、リユーがリンネのチームになった。

『まけないよお！』

フィーが目炎を宿して拳を握る。

「それでは私が戦場を整えさせていただきます」

バレッタがその提案とともに指を鳴らすと、いくつもの小さな雪の壁が出現する。

そして、最後に四方が雪の壁で覆われて、体育館くらいの広さのフィールドができた。

この中で戦い、雪壁に隠れることで相手の雪玉を回避することができるわけだ。

「なんか体が重いな」

「全員の力を一定に抑える空間を展開しました。魔法も使用できません」

「なるほどな」

普段の状況で戦ったら、身体能力が人間という枠組みを超えているし、魔法などの超常的な力があるからバレッタがバランスをとってくれたというわけか。

なんでもありだと、ルールもへったくれもないもんな。

俺たちはお互いの陣地に移動した。

「それでは対戦を開始します。準備はよろしいですか？」

「ああ、俺はいつでも」

「私もよ」

「それでは、カウントダウンを開始します。五、四、三、二、一、スタート！」
バレッタの合図によって対戦がスタートした。

「フィー、いくぞ！」

『おおーっ！』

俺たちは雪壁に隠れながら進んでいく。

「フィー、こうやって雪玉を作っておくんだ」

『わかったあ』

隠れてリンネたちの気配を探りつつ、フィーに武器の作り方を教える。

それからいくつか雪玉を抱えながら二手に分かれて、先に進む。

「フィーは向こう。俺はこっちから行く」

『りょーかい』

——ザリッ

しばらくすると、硬い雪を踏みしめる音がした。

静かに雪壁に隠れて様子を窺う。

「キュッ」

様子を見ていた場所に現れたのはリユーだった。周りをきょろきょろと見回している。
なんだか初めてのお使いでも見ているようで微笑ましい気持ちになる。

でも、勝負は勝負。手抜きはなしだ。

「よっつー！」

「キュキュウ……」

隙をついて雪玉を投げると、まっすぐリユーにぶつかった。

『リユーちゃん、アウト。退場いたします』

バレッタの声が響き渡ると、リユーが転移するようにその場から消えた。

おそろくバレッタが移動させたんだろうな。

これで後はリンネ一人。フィーと二人がかりで追い詰めれば俺たちの勝ちだ。

『フィーちゃん、アウト。退場いたします』

でも、俺の思惑は外れる。

フィーがリンネにやられてしまった。

仕方ない。後は一騎打ちだ。俺は全神経を集中して相手の様子を把握しようとする。

こうなったら動かない方が有利だ。

——ザッザッザッザッ

しばらく待っていると、リンネの足音が聞こえてくる。

ふっふっふっ、これなら不意打ちができる。

リンネとの距離が徐々に迫る。

十メートル、五メートル、三メートル……今だ！

「はっ」

俺が飛び出して雪玉を投げる。

でも、その雪玉がリンネに当たるとはなかった。

「甘いわよっ」

「ぶへっ!?」

なぜなら、リンネは俺の行動を読んでいたようにしゃがんでいたから。

そんな俺の隙を突いてリンネが雪玉を当ててきた。

『ケンゴ様アウト。このゲーム、リンネチームの勝利です』

「やったあ!」

「いやあ、やっぱりリンネには敵わないな」

「そりゃあ、冒険者の訓練でこういうのもたくさんやったからね。簡単には負けないわよ」

俺の戦闘力は超古代文明の力で上乘せされた部分が大きい。

小さい頃からきちんと技術を培ってきたリンネに敵うはずもない。

俺の剣術の師匠でもあるしな。

「ま、これが雪合戦だ。子供のころはこんなに明確なルールに則ってはやらなかったけどな。お互いに雪玉をぶつけあうだけだ」

「なるほどね。結構あっさり終わってしまったから今度はもっと大人数でやりたいわね」

「そうだな」

雪合戦をやるには少し人数が少なすぎた。

次はエルフやドワーフ、それに勇気たちを誘ってみるか。

「よし、最後はかまくらを作るぞ」

「かまくら?」

「なんていうか、雪で作った簡単な洞穴のような家のことだ」

「へえ」

「まあ、作ってみれば分かるさ」

俺たちは全員で力を合わせてかまくら作りを始めた。

「ふう、結構大変ね」

「まあな、普通はもつと小さいからな。ここにいる全員が入れるだけのかまくらとなったらそれなりに時間もかかる」

ここには俺とリンネ、イナホ、フィー、リユー、バレッタの六人がいる。

六人が入っても狭くないかまくらとなると、相当大きくしなければならぬ。

時間がかかるのはしょうがない。

内部を掘るのは俺が担当し、一時間ほどかけてようやく完成した。

『お腹空いた』

かまくらが完成したところで、イナホが大きな口を開けて欠伸あくびをしながら目を覚ます。

確かに、気づけば仕事と遊びで長い時間が経っていた。

イナホの言葉につられて、俺も急にお腹が空いてきた。

「結構動いたから何か食べたいわね」

『ぺこぺこ〜!』

「キュッ」

それはリンネたちも同じだったようだ。

先ほど狩ったベアラビットから獲れた肉は全て倉庫に収納済みだし、あの肉を使った料理でも作るか。

そう思ったが、測ったようなタイミングでバレッタがやってくる。

「お待たせしました。食事のご用意をしました」

彼女の前には料理を運ぶワゴンがあった。

その上には、ぐつぐつと煮え立つおでんが見える。

コンビニにありそうな業務用のおでん鍋で様々な具が入っていた。

寒い場所を食べるのにはぴったリだ。

俺たちはかまくらの中に揃って入る。

「へえ、雪で作られているのに結構あつたかいのね」

「ああ、風が入って来ないだけで全然違うし、雪には断熱作用もあるからな」

皆が興味深そうに内部を眺める。

俺もここまで本格的なかまくらを作ったのは初めてだ。

皆の様子を見て頑張つて良かったと思った。

「それじゃあ、食べようか」

『『『いただきます（キュッ）』』』

早速ワゴンで運ばれてきたおでんから好きな具を選んで食べる。

「まずは大根かな」

綺麗に出汁色に染まった大根を一口齧^{かじ}った。

あつたつの出汁が嚙んだそばから溢れてくる。

中心までしっかり味が沁み込んでいて、こんぶとかつおの香りが鼻を通りぬける。

ああ、これだよ、これ……

寒い時期にあつたつのおでん。体の奥からしみわたっていく。

「卵、美味しいわね」

リンネは卵が気に入ったらしい。

おでんの汁をしっかり吸いこんだ卵も捨てがたい。

『やっぱりお肉だよねえ』

イナホは牛すじがお気に入り。やはり肉か。

もともと串に刺さっていたけど、それだけじゃ足りなかった。外して山盛りにしてもらっている。牛すじも悪くない。

『しらたきっていうのすきい』

フイーはしらたきが気に入ったらしい。

おでんの中で一番出汁の美味さを味わえるのはこれじゃないだろうか。その上ヘルシーなのでいくら食べても太りにくい。

俺もなんだかんだでおでんの中でしらたきが一番好きかもしれない。

「キュキュウッ！」

リユーはもち巾着を美味しそうに食べている。

しらたきと違い、もちは高カロリー。

つついっい何個も食べてしまいそうになるが、太ってしまったのが難点だ。

他の具材もしっかりと中まで味が染みていて美味しかった。

相当の量が用意されていたはずなのに、五人でほとんど食べつくしてしまった。

「食後のデザートもございますよ」

「なにかしら」

「おしるこになります」

バレッタはそう言ってリンネにお碗を差し出す。

リンネはクンクンと匂いを嗅いだ。

「色はすごいけど、この甘そうな匂いは美味しそうね」

おしるこはぱつと見だと黒寄りの紫色の液体だからな。

確かに食べ物では、あまり見えない色かもしれない。

リンネが臆せず口に入れた。

俺と一緒に未知の料理を食べまくったせいで慣れてしまったみたいだ。

「美味しいわね。餅とこの汁の素朴な甘さがよく合うわ」

リンネはおしるこの美味しさに頬を綻ばせる。

フイーたちもすぐにおしるこを受け取って美味しそうに食べ始めた。

俺もバレッタからおしるこのお碗を受け取って口に運ぶ。

うん、美味しい。ほんのり塩味の入れることで引き立つ小豆の甘みが餅に絡む。

「おかわり！」

リンネがバレッタにお碗を差し出した。

仲間たちも我先にとお代わりを始め、俺も出遅れまいとそれに続いた。

「よし、ここで最終兵器を出そうと思う」

「なにそれ」

「こたつだ」

「こたつ？ 名前だけ聞くと全然強そうに思えないわね」

「何を言ってるんだ。こたつは入ったら、二度と出ることができない最恐の道具なんだぞ」

「ホントかしら」

「見てろよ？」

俺はエイダスを使って倉庫からこたつを取り出すと、かまぐらの真ん中に設置した。

その大きさはかなり大きくて七、八人でも入っても余裕がありそうだ。
そのまま俺は靴を脱いでこたつに入って横になる。

「ああ、これこれ……もう出たくない……」

超技術で造られたこたつはすでに保温されていて、足先からじんわりと温まっていく。

「あ、ずるい。私も」

リンネも滑り込んできた。

「つめたっ」

リンネの服が当たって一瞬びくりとしてしまった。

「ああ、これはお風呂や暖房とも全然違うわねえ。あつたかいわあ」

だが、俺の反応を気にせず、リンネは恍惚の表情を浮かべている。

彼女もこの魅力に取りつかれてしまったようだ。

『あつたかあい。もうずっとこの中にいたいな』

流石猫。こたつの中で丸くなるのは異世界でも変わらないらしい。

『ねみゆくなってきたあ』

こたつで横になったフィーはウトウトし始める。

リユーはすでに寝入っていた。

俺の意識もなんだか遠くなってきた。

気づけば意識が飛んでいた。



「ん？　ここは……」

「おはようございます。こたつで寝入っておられました。二時間ほど経過しています」
こたつの中の居心地がよすぎて、いつの間にか意識が飛んでいたみたいだ。

「そうか。全員一旦起こして馬車に移動しよう」

「かしこまりました」

俺たちは馬車で一夜を過ごした後、依頼の達成報告をするために港町に戻った。

——ガヤガヤツ

ギルドの扉を開けると、中はなんだかざわついていた。

近くにいたりザードマンのような見た目の魔族に話しかける。

「なあ、この賑わいはどうしたんだ？」

「ん？　ああ、これはジンライさんが来ているのさ」

「ジンライ……ああ、もしかしてSSランクの？」

「そうだ。この辺りではかなり有名だからな。慕ってる奴が多いんだ」

間違いない。勇気たちが捕まったという冒険者だ。

もしかしたら話を聞けるかもしれないな。

そう思いながら、前回対応してくれた吸血鬼の受付嬢の所に並ぶ。

俺たちの番になると、吸血鬼さんは不思議そうな顔で俺たちを出迎えた。

「ケンゴ様、リンネ様、いらっしやいませ。お早いお戻りですが、いかがしましたか？」

「ああ、依頼を完了させてきたので報告に来た」

「え、本当ですか!?　すぐギルドマスターに報告してきますので少々お待ちください」

吸血鬼さんは目にも止まらぬ速さで席を立ち、ギルドの奥に消える。

「ジンライが来ているなら結構待つことになりそうだな」

「そうね。部外者が一緒に話をするわけにもいかないだろうし」

そんな風に考えていたが、俺たちの予想は裏切られた。

「はあ……はあ……すみません、お待たせしました。お二人はすぐに来てほしいそうです」

俺はその言葉に疑問を持つて尋ねる。

「ジンライが来てるんじゃないのか？」

「か、構わないそうです」

「分かった」

俺たちは不思議に思いつつもギルドマスターの部屋に向かった。

ソックをして中に入ると、ソファに座る上裸の男が目に入った。

俺たちを見るなり、対面に座っていたアコーニが嬉しそうに迎える。

「おおっ、もう依頼が終わったって？　SSSランクってのは伊達じゃないな」

「一人ならもっと時間がかかったわよ。早く終わったのは皆と一緒だからだわ」

「なるほどな。依頼達成の手続きはこっちでしておく。とりあえずこいつをお前たちに紹介するの

が先だ。ジンライだ」

アコーニの言葉で、ジンライが席を立てて俺たちに近づく。

「ジンライだ。SSランクの前で言うのもなんだが、SSランクの冒険者だ。よろしくな」

「知ってるなら自己紹介はいらないわね。よろしくね」

「俺はケンゴだ。よろしく」

俺たちは握手を交わす。

「で、なんでジンライがいるところに私たちを呼んだの？」

「ちょうど、そのことを話していた。お前たちは魔族の地で人間が捕まり、絶海の孤島にある監獄に送られたのを知っているか？」

「いや、知らないな」

話を聞いた瞬間、勇気だと気づいた。

ただ、魔族の国に来たばかりの俺たちがそんなことを知っていたら不審に思われてもおかしくな
いから嘘を吐いておく。

「そうか。少し詳しく話すと、ジャックという商人がユウキという人間たちに殺されそうになった
と訴え、彼らを指名手配したんだ。それをジンライに捕まえてもらったんだ」

「そんなことがあったのか。で、それがどうかしたのか？」

この話と、俺たちがここに呼ばれた因果関係が分からない。

「実はこの話には続きがあつてな。このジャックという男にはとある疑いがかかっていたんだ。違

法な奴隷売買に関与しているのではないか、というな。ただ、あいつらは狡猾で商人という立場を
使って魔族たちからも信頼を得ていたため、なかなか尻尾を掴まえられなかった。ターゲットも他
国の人間ばかりだったしな。だから、確実な証拠を手に入れるまでは泳がせていたんだ。ユウキた
ちが襲われたのも、現場を押さえるために俺たちが見逃していた、いわば囮として使おうとしたか
らなんだ」

俺たちはアコーニの説明を静かに聞いた。

まさかそんなことに巻き込まれていたなんて、勇気たちも災難だな。

「本来ならユウキたちがジャックに襲われてすぐ、俺たちが介入する予定だったが、そこで一つの
誤算が生じた。ユウキたちは思った以上に強く、ジャックたちを返り討ちにしてしまったんだ。そ
の結果、ユウキたちはジャックから指名手配をかけられた。もしこのままジャック側の人間に捕ま
れば殺されてしまう恐れがあると考えた我々は、やむなくジンライに捕縛をお願いすることにした
というわけだ。監獄島に送ったのも、ほとぼりが冷めるまでジャックの手が届かないところで身を
隠してもらうつもりだったからだ。まさかその船が沈むとは思わなかったが……彼らには悪いこと
をしたな」

アコーニは後悔しているようだ。

まあ勇気たちにしてみれば、完全に巻き込まれただけの被害者だからな。

ただ、まだ彼らが信頼できるとは限らない。

勇気たちのことを話すのはまだ早いだろう。

「で、そこまで話して俺たちにどうしてほしいんだ？」

俺はアコーニたちに単刀直入に尋ねた。

「早い話が、お前たちにジャックたちを捕まえるのを手伝ってほしいんだよ」
それまで黙っていたジンライが口を挟む。

「なるほどな」

俺たちが呼ばれたのは、協力要請が理由か。

そもそも勇気たちから話を聞いた時、なんで生き残ったのか疑問だった。

いわば魔族にとっては反逆者のような扱いを受けていた勇気たちなら、処刑と称してジンライが命を奪ってもおかしくないはずだった。

実力的にもジンライが負けそうとは思えないしな。

裏で冒険者ギルドの計画が動いていたのなら理解できる。

「まあ、そういうことだ。君たちならジャックにやられることもないだろうし、仮に指名手配されても捕まらないからこの仕事にうってつけなんだ。それにこんなことを言うのは失礼だろうが、君たちはここに来ただけで魔大陸では知名度が低く、ジャックにも顔を知られていない可能性が高い。だから、二人には囨になつてほしいんだよ」

囨という言葉聞いて、俺は眉を顰めた。

「勇気つて奴がそんなことになったのに、また囨を使うのか？」

「それは……」

アコーニが苦い顔になつて口を嚙む。

だが、前例があるんだから、こう返されるのは覚悟の上だったはず。

しばしの沈黙の後、アコーニに代わつて、ジンライが肩を竦めて言った。

「まあ、そう言つてやるなつて。流石にただの商人をいきなり捕まえるなんてのは、ギルドの立場的にも難しいんだ。しかも実態がどうあれ、魔族たちがジャックを信じているせいで、ジャックが被害者という認識になつている。捕まえるには決定的な証拠を押さえるしかない」

「なるほど」

「それに、かたや剣の女神で、お前にいたつては、ギガントツヴァイトホーンを倒したSSSランクを超える期待のルーキーであり、エルフの国、ドワーフの国の英雄さんだろ。簡単に死ぬようなタマじゃねえだろ」

「へえ、俺のことを知ってるのか」

まさか俺のことが知られているとは思わなかった。

全部成り行きで対処しただけなんだけどな。

だから、勇気たちとの関わりも知っているんじゃないかと一瞬警戒したが、特にその辺の情報はないみたいだ。

ひとまず今回はある程度力量を踏まえた上で俺たちに頼んでいることは分かった。
そういうことなら引き受けてもいいか。

「まあな。それでも情報はいろいろなところから仕入れてるんだ。情報は命だからな」

「流石SSランク冒険者だな。分かったよ、依頼を受けよう。リンネもいいか？」

「ええ、面白そうだし、問題ないわ」

「本当か？ 助かる」

返事を聞いたアコーニは、本当に心の底から安堵したように深いため息を吐いた。思いがけない依頼だったけど、勇気たちの恨みを晴らせるならちよいどいい。しっかりと引導を渡してやろう。

「それで？ これからの予定は？」

「二人には変装してジャックが拠点にしている街アルベツィに行ってもらおう。途中まではジンライに案内させるつもりだ。街に着いたら魔族語を知らないふりをして、困っている様子を見せながら過ごしてくれ。いずれジャックの方から接触してくるだろう」

「分かった。出発はいつにする？」

「そうだな。明日の昼でどうだ？」

これから街を見て回ってから出発するにしても十分な時間だ。

「了解。話はそれで終わりか？」

「ああ、頼みたいことはそれだけだ」

「そうか。それじゃあ、良い宿を教えてもらえないか？」

「それくらいお安い御用だ」

俺たちは街の地図を見ながらお勧めの宿をいくつか教えてもらった。

「じゃあ、俺たちは帰るわ。ジンライ、明日はよろしくな」

「おうっ」

ジンライと挨拶を交わして、俺たちはギルドを後にしたのだった。

「ここが良さそうだな」

俺たちはアコーニに紹介された中でも一番良さそうな雰囲気のホテルにやってきた。

ここも巨体を持つ種族に合わせて建物全体が造られている。

受付もギルドと同様に、種族のサイズによって分かれていた。

人間サイズのカウンターで受付を済ませて、一番良い部屋を取った。

部屋に入ると、あつという間に夕食の時間になった。

「でっかあつ！」

「すごい量ね」

『食べるぞお！』

『おいしそー！』

「キュッ！」

提供された料理は、どれも巨人サイズで、アメリカンサイズをも凌駕する（ゆうが）ような大きさだ。でも、俺たちには大喰いが揃っていたので、あつという間に平らげてしまった。ベッドもかなり大きく、なかなかいいホテルだった。

第二話 悪徳商人をぶっ飛ばす

翌日。

俺たちは街の出口の近くでジンライと落ち合う。

「よお、待たせたな」

「いや、気にするな。それで、どうやってアルベツツイに行くつもりだ？」

「竜車を借りるつもりだぞ」

竜車っていうのは馬の代わりにトカゲっぽい動物に荷台を引かせる乗り物らしい。馬車よりも速そうだけど、シルバとチャリオンと比べれば遅いだろう。

「そうか。それなら俺たちの馬車で行こう」

「竜車は相当速いから馬車じゃ遅くなるぞ？」

「俺たちの馬車は普通の馬車とはちよつとだけ違うから大丈夫だ」

「ん？ まあ、いいか。分かった」

ジンライが頷いたところで俺たちは街の外に向かい、倉庫から馬車を取り出す。

ジンライは物珍しそうにシルバとチャリオンを観察しながら言った。

「確かにこいつはなんか速そうだな」

「だろ？ ほら、乗ってくれ」

チャリオンの扉を開けて、皆で中に乗り込んだ。

ジンライが呆然としたまま内部を見回している。

「おいおい、なんだよ、こりゃあつ……」

「まあ、その辺に適当に座ってくれ」

「あ、ああ……」

俺たちは各々好きな場所に座つてくつろぎ始める。

ジンライも俺に促され、恐る恐るソファに腰を下ろした。

「その町はどっちの方角にあるんだ？」

「あ、えっと、ここから東に行ったところだな」

「了解。それじゃあ、チャリオン、東の方に向かって進んでくれ」

『了解しました』

シルバが嘶いて、馬車が動き始めた。

「しゃべったあ!？」

「実はそうなんだよ」

「もうわけ分かんねえな。喋るし、速いし、これ馬車じゃないだろ！」

「いやいや、どう見ても馬車だろ」

さっきからジンライがいいリアクションをしてくれて大助かりだ。

立ち読みサンプル
はここまで